



ユニークな界面化学で、 オンリーワン企業をめざす

—株式会社ミズホケミカル 根津祐史社長&根津拓史取締役—



根津祐史社長 1944年生まれ。昭和56(1981)年入社

日 々の生活のなかで欠かせないものは数多くあるが、クリーニングもその一つだ。仕上がったシャツを受け取る時、そしてそのシャツに腕を通す時、とても気分がいい。しかし、このクリーニングがどのような工程で仕上げられているかを知る人は、ほとんどいないだろう。そんなクリーニング業界とともに縫製業界の世界でその名を轟かせている会社が、株式会社ミズホケミカルである。その二つの業界にとって重要なアイテムであるアイロンの滑りを良くする材料をはじめ、シミ抜き剤、洗浄剤、仕上げ剤、柔軟剤、漂白剤などさまざまな製品を開発し、二つの業界のプロが使う現場に供給しているのだ。

会社創業は昭和32(1957)年。そのきっかけは昭和30年に遡る。アメリカGE^{※1}社が開発したシリコーンオイル^{※2}を東芝の知人が、「何か使い道はないか」と化学品に造詣の深い初代社長の根津英比古さんに相談を持ち込んだことに始まる。試験をしてみると、無臭で滑りがよく、耐熱性がとてもいいことが分かった。その当時、クリーニング業界でアイロンの滑りに使っていたのは食用油で、すぐ滑らなくなり、耐熱性もなく、しかも酸化して黄ばむという弱点に現場の人たちは困っていたという。そこでシリコーンを使ったアイロンの滑り剤として「アイロンの友」を開発・製品化すると、瞬く間にクリーニング業界に普及していった。さらに同じくアイロンを使う縫製工場でも使われはじめ、新たに縫製工場内に設置され始めていた高速ミシンの熱による糸切れにも対応、シリコーンの糸滑りと耐熱性によって問題解決がはかられ、株式会社ミズホケミカルは二つの業界には欠かせない存在となる。

ユニークなモノづくり

その後、二代目である根津祐史社長が入社後、クリーニング業界や縫製業界向けに多くの製品を生み出しています。

祐史社長 私は昭和45年から10年間日本の化学会社に勤め、炭素繊維の開発、発電所向け排煙脱硫法の開発、そして昭和53年からはがん診断法の研究などに従事していました。そして父親の元に戻り、この会社に入社したのは昭和56年、35歳の時ですが、社員は父親とふたりの従業員のみだった3人でした。3人しかいない会社をどうやって盛り立て、小企業が生き残るためにはどうすればいいのか、日々考え続けました。一般消費者向けの製品は消費者が飽きれば使ってくれません。しかし専門業者であるプロが認める製品なら、ずっと使ってくれます。しかも大企業が手を出さない、ニッチな製品づくりこそ我が社の進む道だ、と。ですから、お客さまからの「こういうものがないか」といった相談や、わが社の調査技術に頼ってくださいる方からの依頼によりさまざまな製品づくりにチャレンジしてきました。新商品をつくることで従業員が活性化し、会社自体も活気づきます。

——新たな製品づくりは、どのような設備と体制でつくられているのですか。

祐史社長 我が社のヒット商品である、縫製工場の接着プレス機やアイロンの樹脂汚れを除去するパウダー「ローラックス」を製造する装置は、私が設計して鉄工所に依頼して作りました。また、棒状クリーナーはろうそくを作る機械を改造して、生産しています。このように生産装置も自社独自のものが多く、各製品についてもオリジナルなレシピを確立して、日々製造しています。一方で、ハイテクよりはローテ

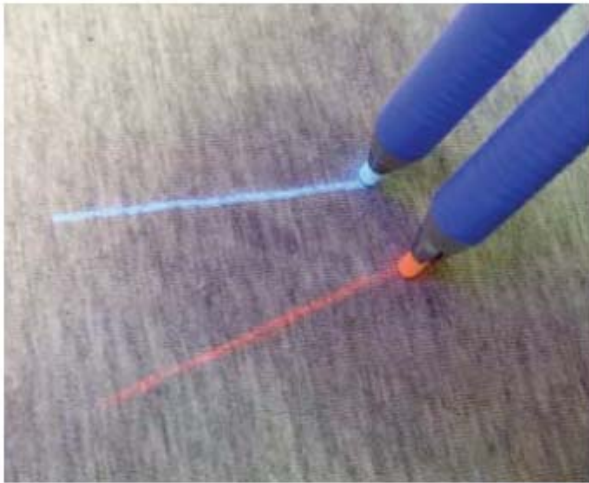


根津拓史取締役 1980年生まれ。電子部品メーカーに8年勤務後、2015年7月入社

※1：ゼネラル・エレクトリック (General Electric Company)。トーマス・エジソンをルーツとする電気事業を中核とする多国籍コングロマリット企業
 ※2：シラン合成化合物で天然には存在しない。オイル、ゴム、樹脂などさまざまな形状があり、耐熱・耐寒性など多くのすぐれた特長がある

【会社概要】株式会社ミズホケミカル
 創業：1957年 代表取締役：根津祐史
 本社・工場：横浜市都筑区池辺町 3473
 ☎ 045-935-1451 FAX 045-935-1533
 E-mail: info@mizho-c.jp URL: http://www.mizho-c.jp
 ※横浜知財みらい企業認定

ブラックライトを当てるとくっきりと見える



海外展示会に積極的に進出



ク、完全自動ではなく半自動での製品づくりです。クリーニング向け製品開発で培った技術で、ニッチ市場にユニークな製品を生み出すフォミュレータ^{※3}として、開発・製品化することに私たちは集中しています。そのために定年退職した社外スペシャリストの活用や、製品づくり以外の輸出貿易業務などはアウトソーシングしております。

界面化学^{※3}で未来を拓く

——クリーニングや縫製工場などからの依頼で、新たにどのような製品が生まれていますか。
 拓史取締役 縫製工場から頼まれて開発したものに、UV（紫外線）発光マーキングがあります。洋服のボタンの位置決めは表地に印を付けますが、その印は見えてはいけません。そこ

で青、赤の発光マーキングペンをつくりました。それはブラックライトを当てないと見えないのです。特に外に刺繍がついた大手下着メーカーなどの工場や、スペイン・ポルトガル・イタリアなどの誰もが知っているブランド服の工場です。使われています。

—— としても一つ、第3の新規事業となるもので、家畜用の液体ビタミンがあります。ある大学のゼミから「クリーニング用製品をつくっている会社がなぜ液体ビタミンを作っているのか」と質問を受けました。確かに不思議に感じるとはありますが、これにはわが社の特性が大いに関わっているのです。例えばシミ抜き剤は油汚れを落とす製品ですが、そこには界面活性剤^{※4}を使って油を水に溶けるようにする技術が必要なのです。わが社はその独自技術を持っています。

すから、ある製薬メーカーから「動物用飼料としてビタミンA、D、Eなどの油性ビタミンを水溶化できないか」という依頼があったのです。「動物用の栄養ドリンクを水に混ぜて飲ませれば、家畜の夏バテを防ぎ、病気になる体力を付ける事ができる」と。あるいは、乳牛の出産後は急激に血中カルシウムが不足し、死んでしまうこともあるので、そうした出産後には液体カルシウムを一気に飲ませるのだそうです。飼料会社は大手企業ばかりですが、固体飼料は扱っていても液体飼料をつくる技術は持っています。わが社は液体飼料の開発をはじめです。20年のキャリアを持っています。

—— 今後の事業展開を教えてください。

祐史社長 自宅で洗えるシャツなど、カジユアル化が進み、夏はクルビズが叫ばれる昨今は、クリーニング需要が減っています。また、縫製工場も日本→中国→東南アジア→アフリカへと人件費の安い地域や国に移動しています。こうした時代状況の変化のなかで、今後は受託生産による新規市場の開拓、そして界面化学による新たな液体飼料の開発などのウエイトが大きくなると思います。さらに、アスベスト飛散防止剤のような新規の製品づくりなどさまざまな開発を手掛けていこうと考えています。

現在、我々の技術に対して市場から持ち込まれるニーズは高いと思います。しかも大手企業が手を出さないようなニッチ市場のニッチ製品で、ナンバードワンよりは今までに培った技術を駆使して、オンリーワンを目指す企業であり続けようと考えています。

※3：二つの物質が接する境界に生じる現象を扱う化学。液体における界面化学が扱う現象には、乳化、拡散、浸透、濡れ、分散、吸着などがある
 ※4：分子内に水になじみやすい部分（親水基）と油になじみやすい部分（親油基）を持つ物質の総称。石けんをはじめとする洗剤の主成分